

私は人も物もすべて「縁」と解釈する傾向があって、「今この人(物)に出会ったのは自分に必要なものを得るための天の配慮」というような厭世的思考を持つ人間である。もっともそういう解釈に傾いたのは、実際にそういう出来事があるからである。音楽・絵画・文学の分野で私が興味を持つ人や物を辿っていくと必ずつながりがある。別々の場所で知り合った別々の人の話を聞いているうちに、実は彼らが友人同士だったことが判明したり「フランス語の詩をやっているはずなのに、なんでイタリア語に行くかなあ」「西洋物をやっているはずなのに、なんで東洋思想に行くかなあ」と自分自身に半ばあきれつつやっていると結局根本でつながって、その予想外の収穫に驚く。まるで小宇宙を周っているみたいに出会う人間、出会う事柄がひとつにつながっている。結局人生は三角でも四角でも円でもなく、球形の中の直線なのだと思う。

また私はひとつことに興味を持つとのめり込むタイプである。たとえそれが一時的でどんな分野であるにせよ。そしてその没頭が引き起こす不思議現象がある。

ある年の忘年会で配る会報に、12月だから『聖しこの夜』の歌を訳して載せようと思った。そこまでは良いのだが、なぜかシャンソン・フランセーズの会なのに原詩のドイツ語と英語ヴァージョンを書いた。何の疑問もなく。因みにフランス語の『聖しこの夜』も存在する。そしてその会のゲームで私に当たったのはドイツワインだった。この手の話は他にもいくつかあるが、究極はイタリアの「マドリガーレ」である。

もともと私がシャンソン・フランセーズの訳を書くときは、歌のほうからやってくる。これを書こうというより、口から飛び出してきた言葉を辿って歌にたどり着くわけである。いわばフランスの歌のほうから近づいてきてくれる。この現象がイタリアの歌でも起きた。「私の愛する輝く星に告げた」の解説を聴いたはずなのに、その時私の頭にやってきたのは「アマリッリ」だった。朝の5時ごろ何かを感じて目が覚めるとその歌が頭の中に流れる。何回か続くのでそれを訳してみる。終わったと思ったら今度は『そよ風が吹けば』『ヴォラーレ』がやってくる。究極は『Non pavento (Amante fedele) 恐れなくて(忠実な恋人)』である。この歌が頭の中に流れて夜中の1時半にびっくりして目が覚めた。そのとき私は「あのCDの1曲目の歌だ」と即座に思った。私はおそらくこの歌を2回しか聴いていない。だからわざわざ起きて確かめるべくCDを聴いた。間違いなかった。とりあえずそこまで確認して眠りにつき、その後訳に取りかかった。昔の歌だし慣れないイタリア語の詩の解釈は難しい。大いに悩んで「終わった」と思って眠りにつくと、夢の中に顔をヴェールで覆った女性が現れて「〇〇さんに頼まれてきました」と言う。「誰に？」と聞き返す間もなくいきなり外国の石造りの城に案内されたかと思うと次々に違う部屋の景色が目の前に広がる。びっくりして目が覚めると眠りについてからわずか30分しか経っていなかった。

そしてマドリガル・コメディ作曲者のアドリアーノ・バンキエーリのことを習ったのはついこの間のこと。『獣の対位法』の自分なりの解釈が「終わった」と思って忘れていたら、シャンソン・フランセーズの忘年会で驚いた。部屋を出るとき目にしたその室名は「サン・ミケーレ」バンキエーリは「サン・ミケーレ・イン・ボスコ」のオルガニスト。「記念にどうぞ」と店の名刺をもらい、その日は「イタリア語頑張ってください」と言われて帰ってきた。フランス語を推奨する会なのに～。(2012.12.9)